

墨江東地岸設
屏迎同人藉紳
燒松子風清王
屑塵
片秋
掛那為張導曲
住不道人清風
林下茗德無一
點塵

茶大乃空と
とんてかかる
こよもろ



地墓田蔭たつあに側東る入に道街吉住らか宮今

飛田から阿部野へ

梅原忠治郎

飛田の墓があつた舊址はと、物知り顔のおつさんに尋ねたら、あの歡樂境の飛田遊廓のあるとたよと教へてくれる。常人はワシ程とはまり易い錯覺だが、此はトンダ大違ひだ。折古圖を披いて見ると、紀州街道の今宮一里塚のあつた地點から少しく南に、東南へ斜に阿部野街道へ上る道がある。此道に沿ふて北寄り一帯が墓地で、南寄りに仕置場のあつた所だ。今宮村字八田、現在は西成區八田町及び南へかけて東田町である。此地域六七反ばかりもあつたらう。主として天王寺方面及び近里の人を葬る。またその東は高卒都婆墓所とて、參歌歩許り(凡そ百坪)の小區域では、有縁無縁一切衆生供養の卒都婆の意で、非人乞食行倒人を埋めたと云ふ。外に「内院の墓所」と誌したのは何所か此名は都卒の内院から發したもので、彼の秋野坊の墓所が、今のラヂウム温泉の南方邊たと傳へるから此の同地點か。是より本海道に出る

今宮村壹里塚あり、出駕籠有

水茶屋 一里山又右衛門(外四軒畧)

此間西手に木津村はか有、東手を意田といふ垣外長吏非人のかしら也

飛田から阿部野へ

のすめる在あり。同所墓あり。日蓮宗大石塔あり。「住吉名所鑑」

見渡せば天王寺の堂塔造けく、一心寺の森は東に高く、南へは今宮新家（曳船停留場邊）から、天下茶屋、住吉へと一筋に道は野面に人家斷續し、西は沖漕く白帆のほの見ゆる名吳の浦にも程近し。

此は在りし昔の此邊りの風光で、殊に墓地には卯塔累々として立ち、仕置場即ち刑場さへもあつた。此所に送らるゝ重罪人は馬の背に乗せられ、命は細き流に架る石の橋、地獄に向ふ身の名は極楽橋を打渡る。放火犯は火培、殺人犯は磔、強盜は打首と刑罰が行はる。

安永天明頃には、仕置は鳶田、千日、野江、又沖掛りは安治川口、木津川口と定めらる。之等の刑を行ふ人々は、鳶田、天満、天王寺、道頓堀の四箇所に置き、總人員千二百人程配置さる。此等行刑の仕事を取扱ふ階級を單に四箇所と稱えた。

さて名吳の浦の景勝は亡せて、浦に因める町の名は残れど、名におう長町裏から移り住んだ釜ヶ崎とはなる。南霞町から西へ紀州街道に出で、車馬の往来繁しい中を南へ關西線のガードを過ぎ一町ばかりで、古道をそのままに東南に曲れば、廣いく街道が南北に通じて大部分は出來上る。附近は多く空地又はバラック建の此廣い道一帶から西へ南海電車の阪堺線路の西邊までが、即ち飛田墓地の舊跡である。

明治三十年頃迄は僅にその名残を存したが、今は盡く阿部野又飛田の遊筋を通りぬけて、阿部野墓地へと出かける。阿部野の舊跡の附近に、國分寺が今もあるが、此飛田の墓跡地の東南（山王町二丁目一帯）にも、字地名が、國分寺と誌してあるのは詳しくは考へるの要がある。

阿部野墓地に移された元千日の迎佛（船本撮影）



阿部野の墓地が設けられたので、最も早く廢し移された此墓地跡が、關西線の土堤、南海の阪堺線、天王寺線、平野線とかくも多く蜘蛛の巣のやうに、鐵路が周圍に張り廻された此地形で、然も今尙畫さへ通るのに氣味の悪い（別の意味で）場所柄とて、いくらついに近くに歡樂境があつても發展のしやうがない。

「娑婆でこそ男女の差別あれ骨となつてはかわらざりけり」と

飛田から阿部野へ

あるばかりだ。

身長凡そ七尺ばかりの石佛地蔵は「太子地蔵」と稱して、その臺石を見れば、左の如く刻つてあつた。

寛政二庚戌七月二十日

宿坊

鼎專院融順

此より尙珍らしいのは、此堂内に建つ大きな石碑（高凡九尺、幅凡三尺五寸）であつた。

（碑文）

西生郡鴉田之地者荒陵寺之所葬也遭慶長之義戰盡爲荒墳矣嗚呼先世之丘壟今焉在哉憶夫往昔封塚之人豈不期于萬世乎故是歲之多衆議而新復舊墳爰設齋會以繼先人之志意也是蒙太平之澤以養生喪死之表儀而已兼銘焉云

曾此之邑

葬先世人

起墳復舊

刻石維新

奏假供果

爰享采蘋

嗚呼繼志

慶無疆春

元祿十一歲次戊寅日凍中浚

天臺沙門

融順識焉

臺石には横に「開宗廟」と刻る。之に依れば、慶長十九年の戰亂に依て、それ以前の臺石は壞滅したので、元祿時代（八十四年後）に至りて整備したものだつたことを知る。融順は同名でも大分時代が放れる。

飛田は鳶田、鴉田、鴉田などとも舊記には見える。此墓地は聖德太子が封せられたものと傳へるから起原は最古と云ふべきだ。

諸津國於勢濱江鴉田熊襲等數地、都東伍萬捌仟貳百伍拾代居宅

飛田の遊筋を通りぬけて、阿部野墓地へと出かける。明治六年七月に火葬を禁して、天王寺村、長柄村、岩崎新田の三ヶ所に埋葬地を新設した。此地は阿部野に近いので、阿部野墓地と呼ばれた。此が七年三月のこと、飛田、千日にあつた墓の多くが茲に移し葬られた。その後八年五月火葬廢止令が解かれ、火葬を營業とするに及んで弊害もあつた。八年七月には八弘社の事業成り、遂に四十年十二月には凡て市營となつた。此間に岩崎の墓地は瓦斯タンクに變つて、此地に墓諸共に合併され、長柄にあつたものゝ一部も亦此地に移さる。されば頗る安大な地域に累々と建つ墓地を巡りて調べるなどゝは中々以てハカどらず。有縁無縁一切衆生頓證菩提と心に數珠つまぐり、大きな烟突を背後にして西は淨土の無縁墓地へとまゐらうづるにて候。

此道すがらふと眼についたのは通道の左側に、

明治八年乙亥十一月建之

園林院梅花日香信士墓

音羽屋

次に無縁墓に近く右側に、

竹田 劇場

朝日 瀉倉

燒死人之墓

田中 ハツ

（裏面）

明治九年丙子四月十八日

扱此で思ひ出すのは、下寺町遊行寺の臺所内に

於竹田芝居燒死

飛田から阿部野へ

平川角造

妻 たい
女 よね
同 ふさ

こんなのがあつたことで、之と同一對のものである。
千日か飛田か二つに一つづつどちかにあつたと云ふ、南と北
にいづれも東面して無縁墓所の入口に、一つは文化八年辛未七月
一は明治十三年辰一月、年代は異なるも同じ妻の迎へ佛が立つ。

無縁者合葬之碑

本碑ハ元岩崎墓地ノ無縁遺骨二千四百八十六名及元天王寺
柵外墓地ノ無縁遺骨ヲ合葬セルモノナリ。

昭和三年八月二十日合葬

自明治八年三月 岩崎墓地
至明治四十年六月

その北の方には更に行路病者を葬つた。

合葬之墓

昭和四年七月建之

大阪市

がある。

憶出せば此邊の一面は荒野原であつた、その草原は遺骸をその
まゝ埋めてあつた無縁墓地だつたのはつい近年前のことであつ
た。

此無縁墓地の西北隅には左の如く刑死人合葬者の墓が大小四基
までもあり、その中の一つは單に「合葬之墓」とのみしてある。
いづれも東面す。

合葬之墓

此西北隅の無縁墓の中に掘つたのは
開拓使管下宿館遺井……

(右側) 明治七年十一月

次に東の無縁墓中に、左のやうな妙な法名を連ねたのがあつた

浮海	俗名 六左衛門	遊順	俗名 平六
浮沖	同 仁兵衛	遊沖	同 徳兵衛
正)	乗船 同 市太夫	遊江	同 善太郎
入海	同 太次郎	潮順	同 吉兵衛
(面)	順水 同 仁三郎	順江	同 源吉
順海	同 源次郎	隨潮	同 與八
順船	同 石松		

(右側面) 安永十年辛丑正月十五日

(左側面) (施主人) 備前國仁三郎

右は岩崎の墓地にあつたもので、全く近海に難船溺死を遂げた
人々の供養塔と見たは避目か。

此等凡ての無縁墓地の南に、「大阪府警察官吏墓地」(明治二十
一年十一月建之)の頗る廣い塋域及び更に草原を隔て、西南隅
に「大阪市消防職員墓表」(大正二年五月建之、藤澤南岳書)の
建つ墓地がある。

扱此大阪警察官吏墓地へ入る。さつき刑場のことを書いたから
此墓地を巡るのは縁があらう。その北部は多くは警部級の墓で、
南は巡査級のものであつた。

大阪府警部元山辰太郎墓

明治廿九年十月一日爲職務卒

飛田から阿部野へ

九〇

明治三十二年四月六日

(北面)

囚人 鈴木伊三郎外二百八十人 (南面)

合葬之墓

大阪監獄署

明治三十二年四月六日

(北面)

刑事被告人 懲治人 別房留置人

携帶乳兒 刑死者 佐々木新助外百八十八人

(南側面)

合葬之墓

受刑者 安賀彌太郎

外五百四十八名

大阪監獄

大正八年三月九日

元堀川にあつた大阪監獄は今の堺の刑務所の前身で、前二基は
葭原の墓地にあつたもの、他は長柄にあつたのを此所に移したと
のことだ。

此より北に塵捨場のやうなのがある。その前に左の如き小さい
珍らしいのがあつた。

明治卅九年六月廿五日

水死兒五名墓

南區日本橋四丁目古井戸ニ慘雜發見ス

扱すつと西北隅には無縁墓の重層あり、又東に當つても尙一つ
無縁墓の重層あり。

此は彼の東京倉庫の大火災に殉じたので有名な人、
竹田良英墓

神戸に於て遯卒長として外人を捕縛して領事館に引渡した人、
當時の外交状態としては勇敢な人である。

阿部野墓地西寄りに建つ大阪府警察官吏墓地碑(船本撮影)



故巡査佐藤權之丞墓

刑事の身分なので轉宅に託して悪人より贈賄の目的で酒を贈ら
れたのを斥けたので却て博徒は之を怨み夜に入つて奇禍に遭ふ。

配榮子君遭難格闘最助とある。此碑文を時の警務課長谷口武兵衛
さんが撰んで居る。此谷口武兵衛さんの墓は、南方に建つて、大
阪市長池上四郎さんが撰んで居る。

九一

高知縣士族

故巡査野町盛墓

以恩賜金建之とあつて、明治廿三年九月五日新町の大火にコレヲ病患者を救ひ出したものゝ、感染して罹病して四日を経て致した氣の毒な人もある。

武功績別頑祐墓

明治九年七月八日歿

廣島縣下第十大區十六小區中之庄村小林頑祐

どんな武功だか此だけでは不明、其他「以恩賜金建之」と刻つたものは可なり多かつた。

警官の身としては名譽の死を語るものがある。

大阪府巡査 淺井松之助墓

南 明治十五年十二月卅一日

(左側) 警部長 從七位勳五等 大浦兼武會子葬

(裏面碑文)

大阪府巡査淺井松之助行年三十三年八月泉州堺平民也明治十四年二月巡査奉職爲河州古市警察署探偵天性實直職務勉勵受賞六度也明治十五年十二月廿八日強盜吉田梅吉逮捕之際被重傷斃于其場矣嗚其死可惜其志可賞也是以官怒其死表錄于墓碑以欲令知永世明治十六年一月奉命

大阪府古市警察署長警部

山内林蔵建之

きものは故を知らず。

森彌市郎之墓

鹿兒島縣士族

明治十九年五月四日死 行年十八歳

唯此丈では何の氣もないが、翌二十年五月に、同縣の有志に依つて建てられたる所、彼の長柄墓地にある「猿渡信光」と歿年月日を同じくしたるは頗る奇で、此日の警察事故を知るを得れば面白い挿話が發見せらるゝだらう。

此所にある多くの墓は、長柄より移されたりと云へばざるにても唯一つ「猿渡」だけが彼地に残されたのは何うした譯だらう。

警官墓地に拜辭して、東へ進むと、明治の歌人で國學者の

鎌垣春岡之奥城

明治四十二年十月廿二日歿

享年七十七

自然石の墓表が青苔蒸した壁域に南面して立つ。かくて此廣い廣い阿部野墓地を疲れた眼、渴いた咽喉で猛暑に照りつける砂土の上を行く。やがては我等も此土の下へ……………

はかなくも埋もるはかの燈籠籠

その火の光りはかりしられず

編輯者より

大阪名家の探墓については既に鎌田春雄氏著の「近畿墓跡考」あり、又木村敬二郎翁の「訪碑録」等があつて便益するところ頗る多い、然しそれ等は多く寺院を基とせられてゐるので、今回この特輯を思立つたのは舊時盛んに行はれてゐた七墓巡りの三昧がどう變遷してゐるかを調査し又これ等墓地に散在せる無縁墓から世間體に名高くないとも尊き殉職者や功勞者又は孝子貞婦といつた無名の墓を探求するのが目的であつた、僅々數回の探墓で目的の十分一にも達し得なかつたが所謂七墓の跡を偲び、充分取調べの出来たのは本懐とするところで、同人の勞を多とし又多少とも讀者の御參考にならうと思ふ。

今度の探墓で感慨を深めたのは、一家の浮沈から、曾ては墓城も廣く石碑も立派に建てながら、其後申ふ人もなきまゝに草芒々と生ひ繁らせてゐる箇所を發見して轉た人生の寂寞を感じたことである。

名家の墓で無縁となり、取除けられて他

の墓と一顧に構へず、埋もれてゐるものは實に風の塵に感じ、世に功勞のあつた人の墓などは、たとへ申ふ人がなくとも尊重し、せめて安部野墓地邊りの一隅を劃いて、そこに集合させやうな方法を講じられんことを敢て大阪市に望む。

森繁夫氏が本誌に執筆の歌替祭を本會主催にて來る九月十三日の夜、天満宮の秋思祭に合して催すことになつてゐる、方は各自「秋」の題にて和歌、俳句、漢詩の何れかを自書せるもの三葉を持參し神前に供へ、一葉を献納し、二葉を交換するのである、詳細は九月號に發表する

本誌には鎌田春雄氏、岸本華二氏、禿氏祐祥氏、福長竹亭氏、野間光辰氏に御寄稿を乞ひ玉稿を賜つたことを茲に厚く感謝する。

由井喜太郎氏の三好長慶及義麿の墓は近來の發見で、全く氏の熱心なる研究の賜であらう。

本誌の遅刊慚愧の至りで次號は矢繼早やに發行すべく目下努力中である。

(南木生)

定價金五拾錢	郵税共
十二冊	一年金五圓
六冊	半年金二圓七十錢
一冊	金五圓

(御注文は一切前金に願ひます。御送金は振替口座大阪三二九五七番へ御拂込み下さい。誌代受領は送本によつて御承知を乞ふ。昭和十年七月廿五日印刷 昭和十年八月一日發行

編輯者 南木芳太郎 谷口春雄 谷口印刷所 電話三三三四

發行所 大阪府西成區南上通一丁目 電話三三三四 創元社 大阪府西成區南上通一丁目 電話三三三四